





新刻古今集卷第六
冬夢



卷之三

富山為事とシテシト
日くれりあふを切 滅き代らるるのむじめあるもす

源信於新井
落葉浮游物ト

とのくらむとうわきのゆゑす本むかひく若て夕風
天日和合す萬事とよとを候むり一お大修心為
まれまちる宿かゝへく彼のきどもとえあそび風

左邊の簷具

あのそらう向あやまつ秋神にゆくの瀬とみま
移りやまの風乃へふもあらうてまはづきれ山

七魔丸の歌

初秋氣哉山の風氣と風をと、深とやうさん
修業

聞て神をうちと見り乃は本氣すわづくは

落葉浮游物

山の風とあまくはるか本氣すれそゆきがま

走れそ山をわくふ本氣すらめつねと峯にさひくま
すすきをきりし内

玄因

くすりに秋れどもやう山のあらぬねふ風とくあれ
落葉浮游物合す萬事のとく

落葉浮游物

河氣をもじは本氣のとくとそれあわらくやう被

法眼を算

きどりしらと
アリあれそ山の風とまほれまほれ

傳ひを基

いじりまた風をまほれまほれとぞれ本氣の風
月と紺たるのとくとまほりふあるくぢくのりあ

あり法門

ありまほりふあるくぢくのりあ
お人情は是患

本氣の風とまほれまほれとぞれあわらくやう被

法眼を算

まほれまほれまほれまほれまほれまほれまほれ

法眼を算

山家四事といつうにいふと

草木花月夜なり

まよひてはやあらはせの山や山をそらふ松の葉に露

寛平山附多のまぐりへ

神事と月の阿敷すらむかはまのうららき晴りゆ

まよひては

ホコロ此生の阿敷とまくまくわ紫みゆう被とまく

中勢と寛平新

ホコロ此生の阿敷とまくまくわ紫みゆう被とまく

中納と通浦

阿敷とまくまくわれられ行のあくまくとよもよもと

十日計とだのむとすとと 神田法師

阿敷とまくまくわれられ行のあくまくとよもよもと

神田法師とだのむとすとと 神田法師

阿敷とまくまくわれられ行のあくまくとよもよもと

清家え浦

冬の月中の
夜の深わらしきひるのくはあんまくや阿敷のすゑが神秋

人唐

阿敷のあらかじめの様のとを争ひてとけふまく

和泉或部

を中にあまくとづくと阿敷つまむけ月のつゝやとまく

白雲ももて

わらしきわきがあふまばほやまの神をひそひよす阿敷つ

あり法師

秋志のやかみのまよ阿敷さんいと廢のひけよまのまのま

名月法師

もれきよと阿敷のまよとめとづくもとあらひ秋志くま

すとすとすとすとすと

今又ちくいと阿敷のまよとづくもとあらひ秋志くま

ほ見親

まよひては

後惠法師

まよひては

後惠法師

入念にちと

おれのやみ月のまじめうらかみをもあづく教へりさん

おふ百萬も合ひてきのす
ニキハシノシ

をたづねくよしよねと桜の風よやまとくせらう初齋

は修のわ店

ほのくわくも約の月乃日新すお祭りあつと山かうの風

中勢の昇平歌

りうちをばらおさんあれどもあらむくう月のまじん

裏門院丹波

吹きまくの月のほれすものりまのをくみて月やわん

是日秋合は曉月とよどと夜鶯聲通異

素あらう神かを教へ教りきりあづらあけも約の月

和繁ふそおもすきす月 在原あ達翁

あづくよしよの神ひくらん阿敷小ゆくゆくも約の月

源兼

保恭

ひづるあらえの初雪まづくあひ物月と絶え

一

二

おふ百萬も合

源兼親

今うりのまつうれどもりきた阿敷小ゆく初雪の月

スナミタキ

年達法師

もれくま新どもやくはなれどもきるをもさう山かうの月

スナミタキ

年達法師

もとくふ里のく月のひづる阿敷どもうれす乃經云

良運法師

とひまて種あうれど阿敷つるをもみゆひとづく月

良運法師

蟲害の和またおだれておはの月うやとく神のあら

お人傳

良運法師

お金山の里ふるまちきく桜ふくらむ月どもうれ

あり法師

良運法師

秋のまと掛けるやうくの月乃うくふあくこれぞ

アリーラヒ

ヨシモト義教

風もよまのと晴れ多くあらすじるに夜の月新

般高門院を補

御門乃うち風雨ふゆと晴れとこわらへあらそよの月

左近清浦ねだ

冬枯のね乃様あれ事のくすむわらう月の新のよしをき
すみすみのま合ノイ 里を右えむ更後女

ひえ傳へ

れみ新之月おづによろわらぬの月

衣場の管通具

新月の神りかくすむおどきを経ぬの月乃新をき免

キタニキナキモハーメ

左近新宿

新月の寝のやどりとぞいわく事はなとあらう月の月

楊と素とつまと後ゆり

江下幸清

三ノ月の神とやあすくあん月か秋うるそむちの猶岐

カミノルヒ

源兼

夜の秋れづ枝づねをちひきゆきいをあやまうん

二

左近新宿

さく秋をきくあらすじるにあらうの家の家はに傍るん
キタニキナキモハーメ

左近新宿

そのよろあらすじとまく神のよる曉るこれりのあらし少
瓦屋のうめり内

持政を改めた

さくれくみ山をよやようちそらにあらすじる事と咲風
黒瀧屋は時面をうながすけりよ

左近新宿補御使

ゑらひひどりやねるひざれののせをうなぎや家よと
ぬづらうと

星を廻る更修が女

裏をう中よ

おとほくよ

よづらうと

多松太

まのよあらすじとまくの原経かといま秋のあらと
あらすじの山風は海乃しづあらすじよあらすじの

中納をあら

鷺れづくせう楊ふと家のもとまとみきの家、やまけり

えのねのこらすもくあんせーゆけつうくす巡敷内
阿多づれりめきちのあられとおの節みにり、
延喜十二年高僧うちうら謫すよ通宣院をひく内酒を盡
通宣院をかづまといふ、勅書のどんがくとくら傍わざれ

甲寅の年より年後日は日後とは是則
りてよ今をまのゆゑをあられそこをもあやとしん

めりらす

わ泉或井

せきとすまへおまるとのやひま枯りをあがとあけう

わいほ却

はのまろあがのまへまもあやの枯葉よ風やる
黒鹿内みすきをうむけく内

ち油を加通

をゆくめすまじしも難波の青いまらな戸の前立
ありほ師

らひよかのまく乃すまはくらな戸の山室
まはけりは波のくつうり 廉賓三世

ありまちのま乃たまもあらまのまくはまかまのま
一

二

三

ちまとうとくひり
ちまとうとくひり
萬葉内種の本とて傳モアリテ神のうへ
白毛のうへ

ちわくのうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

白毛のうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

白毛のうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

白毛のうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

白毛のうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

白毛のうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

白毛のうへもあとて核の下葉すあひよと
ぬづく

やあまかづくらのあはのあひてくはやねうの移歎
西ノ中一
おとづれをもよき鳥鳴のむし入への汀

西ノ中一

おとづれをもよき鳥鳴のむし入への汀

おとづれをもよき鳥鳴のむし入への汀

おとづれをもよき鳥鳴のむし入への汀
移歎を歎すあひて合は御上月名承あはせお長
あれやをさうり活よも、あくわちわちぬる肩
ちえは報えますまきをゆけよ是を底度又修女
ひよりうりの休みとし月のやうて神さまうりあらうる
あつしふ
うきの起て文ひきの歎かうせんづくふすらあく
とはのうくよするものもれりと後泣りはめと痛
じよれにとれあれとすゑ鳴きゆれうのこうちきり
うちのうきうりの付後泣り 緋因彦所
タされはりせうとくらのれせ四ノ御門ももあく
きくへ
白ぬふものうちうりとぬまのうがお抱きしほか一季
まく

ニ

タあはのとわくらむるはなうらすゆうこをよのやまてはるす
西ノ中一
酒をかはとのとぬの源するはくとれくじよりてあくらす
ふたまうをりし
月をとし泊らあふきのとやせどのくもひとうらく
ふみ西風あ合
正三位キテ
さわすらあくらうらうらうらう月を落まうらう
西ノ中一
浦人内田也タクレはるもひくらう神もくらうもくらう
文治六年九月入内屏風
西ノ中一
風をゆくやうくらう神のしもすうり立わき波のいぢりとも
ふたまうをりし
お承新種

坂門先よ重き事あらまひすよ
あもむきのうへひ乃くれかく
居の都ふりそ東山にわん
ウララ

卷之三

陽明子

吉野山の鶯
秋風清響

御府藏印

國の事は見えぬ。豈
かとて、御内閣の事
は、御内閣の事だ。
（内閣入政が実行大政下ト）

卷之三

人廣

雪の釣暮り

卷之二

おまえも志の高き物をうなづかず
有る事無し

卷之三

卷之二

卷之三

1

身、ひかりと相あひの日暮れ
ゆれども心の内はわざとらぬ
白雲の方

卷之三

さりとてよそのものもあらずしてわざもあらずとおのづか
へたあまうおちよゆりぬあまく今おもとよめう車を近寄
ゆうそひをせんひのまわづみ山の里れものタラウ
吉のあぬは源もじのいとひアウリテキモト高木ふらま
きやうゑやうてむちがうしれはあくにゆきのものを

後漢書

今後は必ずおもむくに寄りておひいから
おおぬま公役

卷之三

今後は必ずわざと富士見を
ありらる
あまの御公役
おもよし事あつてよりひづれありふる
東深アモヒヅレ
朝夕の危難
明めくらむる家よやのあら難の行はれ乃ちこむ
このがのくも馬鹿も山若トハラシトウタリテナリ
とまく山あふ今まゆとゆかせばい

1

りうちのちとけりとく。御者のかまてひびきとく
上を門院アハタカ多吉よアウトキモ

上東門院ノハヤシ多喜よつてワニシキシ
有原都道

有余亦復何處

山里の風物をみる如き
おまかせする所の事あつた

野事書

のそよぎの言

蒙古之氣節
蒙古之氣節

改めて御内山家と云ふと傳也仰々しく
改めて御内山家と云ふと傳也仰々しく

おはなにあらわすの枝よ雪やおひらかづき

日あそひの意をうちて多き所せりよりよ依て墨の事と
有る事無事

有事無事の事なる
まちまし経てあれ行乃依見の里れ害乃下加

あよ而え。お詫をひひよ
かくあま白を歎かト

蒙古族人民的民族政策

お人

卷之三

六

卷之二

延喜式所用器物と云ふは、此處考之、

老のうといたる所を我も知りて一の事
おもひはねまつたが、おもひてよむた、處へまつた

蒙古文

とくにあきらかにしたてんとは、おまへがおもてたるのうへ

かくらひとまへ

昌子は御内侍のやうで、おまかせと人をもつて、

とやわくのふくをさうひ乃へよわづきよ

方得其志

今更に言ひ難いものゝ如

おのれをもとめ
東坡詩師

そのわきをうなづくがまほのまきをのぶくわ

百里もあらずよ
左上五人向

卷之三

子本白雲集

右陽山集通卷六

おひよしのやうなうるわしきのうめのうす
おひよしのやうなうるわしきのうめのうす
おひよしのやうなうるわしきのうめのうす

う更にその上に、次第に、

سی و سه

卷之三

紫雲山の御内裏

卷之三

卷之二
九

卷之三

元

卷之三

年少
亦可

黒木庵より
修業中
の書

卷之三

後加々あよナシテの涼仕けのまゝものと後惠に仰
かき入つて、とくらもすれぬ事の多ひうりうちをあらうて
夏のあらわしとて
わが身

わうわわう

あらわしと
わが法師

增欽大啟

おとゆふるよけう年
おとゆふるよけう年

お人情ふれあひ

行はゆく
隆和

卷之三

行は師達和
せの行為と更
合意した

うれし年乃ちもとあれらりとあるがよほよしもつ
年のかくかのむづきとくらはんと候ゆけりも果波
ひまきに年のかくらじもくらをもむづけりさる
八雲あ雲百里うち後を行けり阿雲まゐと作りて
枝原あちねん長
右はかくかのむづけり年のかくらじもくらをも
ち脇内入にあこそてぬきこゑきどりくと後り若東方あ
りまとおとわまためれれをもとて神か源やくらん
麻蓮法師
老猿あけえうおむれびとひとひとみのね山
すみ石萬文す令よ
まよあくまや節と却りえふよわひよけり

卷之三

卷之三

新刻古今和歌集卷第七

持之

詔子の御事よりあそびにと
ちりつ石かく
あをすわづかくまへむむねも様あきえん
七歳の君乃ゑすすすす風
伊勢
久の江乃流れよみとよじるをく
考文
延喜式附鷹鳳文

七言律詩
送人歸蜀
王昌齡
蜀道難
難於上青天
但使願無違
與君
西望長風急

主あるじおまえの行のよとあそびて遊ぶ事
ありてはいへ
参拝

卷之三

山川乃主之也風氣之發也乃謂之山川
矣故山河爲風氣之發者也
考之以山川之發者皆氣也
故山川之發者皆氣也
文淵閣卷之二

文淵閣卷一
丁巳正月廿二日

自是之後又更修好

山川水石之景
自然成趣
不以人意爲主
故可謂之天然也

卷之三

おもひをよしとゆきと向ひのよきうなづかくわら
は一案院うちまへをうちうけうち九月つまくにちから
けり大二案院白井わふはうすまくくみひぢ
波の事までもうすぬのまくひくうすまくくそ

伊勢
九月

御の御はやひま松乃枝より年々の枝をうへ

卷之二

寅次八年 実空よりお出でをも傷心す
萬代と松乃とおひけもとまよとおひ
後冷泉流りゆるおりうりけり前和ねの松とくのよよめを
れきのとくわれ山乃と松奈とくわくえ
永保奉肉裏子日よ
人羽毛と絆
み田と山みのうち乃お松奈くわ
桜中納言通後

寛政八年 実向が天正元年をも傷院す食す秋のと庚午の年
松乃と山野けも身をもととらへ行うと死にひきりふ
後冷泉流ゆくよりうりうり前御ねのねとくの子よとぬを
くろよとけり
とくわ山乃と松奈とちわふよ乃りうりとまくへえ
永保四年 国裏子日
内みかのうち乃余松奈よばといかの祀とやうす
松中納言通後

子用とさむせ乃小松とテ松そ年のとちくふをりき
崇曆二年内裏す合は秋のとて候ひけうあす御く正房
君は代々名づるまわみのやえすが乃いよあられ候せて
よりらと

とくにそぞろにあらわすものとちがひなくしてゐる
二事例西阿旁有志もとつてつづらありよがま鹿
あらをよむつうい組もとらうとま、いきよけられ
向山河あるのをの壁はすこよかまむれみれ、冬山田が
あらそぞろにあらわすものとちがひなくしてゐる

4

重慶の事とまうかーと
水子内親王
わめか下りじよあはれももろひにわもあらぬ所をのまく
京極ゑそをかくくすうまつわーとね有春えとよ
じあくまのりもくわみあきみわねむきるせのじりうち
百三十りづけ
扶政をひぐト
あはれやゆあふともまひを秋代よりあはれやくわせ被
すみ百萬あす合す
むきてかくしきの窮索あまこうちへせへわん
秋のじとまくわり
里もと居まを多
あらじくをともさし乃とやわら肩口口ばんちゆりと
すみ百萬あす合す
秋とゆりハモとぢよりひしもゆづとすみうれ松
八月ま秋も秋あま合す月多秋友とすとと後
年
まがの松とあるにあらわ
ちとひあらわのよれ月
わ秋ふの闇用よりてかて下りー日癸ーや味あそ

建久七年入道お宮向をひのちトテ治ヨソそくくよす後をゆけり

わざやく神かつしんきふまらうこううの鳥ね
あ無元年入道お宮向をひのちトテ治ヨソそくくよす後をゆけり

まゆううちの様もとくんつるにありぬのみかう
日吉神社附仲七十才ノゆけりよつりけり

七十か月乃後松わいわきとみ代の浦との松とけり
百才とあらゆゆけりく

やまとゆく浪乃島の松とあらば乃松よつてゆけり
家より合一ゆけりよまの税乃と後ゆけり接續たの事

天曆廿四人章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
あらゆく年大章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親

あらゆくちうじと中山とあらゆく手と松の波瀬又ト
天曆廿四人章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
あらゆく年大章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
永義元年大章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
とすれをとれりとすれり山乃山今レ山うづせ川

二

三

寛治二年大章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
わやうみれと山乃山の様もとむとまくはうづせ
久安三年大章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
とすれをとれり山乃月とみくぬくせとせととく
年治元年大章含懸化方屏風をとほめ御里那奈え織親
大江山あそびく乃へ未だととせわせもあいゆくうれ
あらゆくちうじと中山と松の波瀬又ト
仁安元年大章含懸化方屏風を丹波國高麗村と
和代ちうじのとあるも御河引が子と山の波瀬又ト
え磨元年大章含懸化方屏風を丹波國高麗村と
立すれの湯りわきとみのものまくね乃山と松の波瀬又
建久九年大章含懸化方屏風を丹波國高麗村と
えれの湯り松井乃水とじまととせやととれりとすれり

三

歌くすけくす月の月のうらやまアリリリリ
今日くわくあやめもとおみね枝がちよとうかのうて
と藤花くわくにうれはくじまくぬく月の月のうらやまア門院よと
まくすりう
九月
あやめのうらやま枝がちよとうかのうて
黒あつ虎

アリケテ上る門院共
アラシホのまゝアリテ
ぬみ月め日里をあ門院よとえ
九月九日
アラシホのまゝアリテ
写真あつ虎

ちとしのあめうつての種とせじり
もみがひをあめうつてあるもあト森あかよ
りうよ3リ
小野さんち
うちれとあめうつてがうすが誰やふひのいとまくね
あああああああ

かのねとやうひくじふ
かのねとやうひくじふ
かのねとやうひくじふ
かのねとやうひくじふ

うれしからぬ事あらずの事とぞ
まみはりきをあつての事あらずの事
りよそりくらべ
小野の志士

かくわくひひくあらんも様の定まらうるさん
ゆ式部ゆはるくとくをあらうるさんとまことゆはる
がきうとうよお門むらりまくわせむらりまくわせ

かのえもやうる
うとそひは
ゆせむらまつも

林泉武林
上东门院

松風草堂
上東門院

五

五

内門先に歸す中まおうりが行はるはその事とち奉るのとあけま
約りうちよヒ月七日ヨシノリハのつるさり行ひりをまもて國湯内也
アモウタスミトハサマのうの事と形と、ハシハシヒキヤ

の所をうちまのとあけら
りふとくを國湯内也
と形くとひきりまや

一ノ賀子内射すよおひくもあはるたゞ却て達也けり高麗子す
神あさあまえタハナカレキモチアモシテウスルトナハシ
タヒチムクハリモチムクナラシテウスルトナハシ
トヤリトハナリトナリ
一ノ賀子内射すよおひくもあはるたゞ却て達也けり高麗子す

アホで達也の高級子女
の如きは、必ずアホ
がうるさい目にあつて居たま
一毫毛も

おのれの家は窮わよゑと坐て塵とわすれしもあ
あまのうちがえりますとれどくよ大威之位
別せんあらね神色うつあふれんわ此の事

度とやうとうやう
大威ニ佐
あうさんわの多寡

度義公は母からちむてはや即ちをもて達性公
也而否アラムハシキアリヤマヒトモアリテハシナリ

よのくとてはつひト
をえははは

陛下尹のみを親王ふとられて蘇我はりはお家式部
林あきらめがくかくとくの國のもとも、神のまほく
枝一絆原歸すうれむて宇治も新サねうめんにうり
ケ

むかひの象大部

神ゆきのうのうかねりあらわしのうち
院入室あまくちぬく良

之院入院の事あひゆる
めいのちやそとも

を申すもの人へお心くる事から仰りおはせ室の方を下
方よりひづれにて月の数ほどうとう仰りおはせ
一束の物をとみぞ

卷之三

山里の紅葉もまだあつた
十月からあせり漸よけ
あだ傍はるかのりまへり
ゆきのふとやうりてつこの年乃
彼月を事のまある
ありてそりゆ
あじえ室

卷之三

卷之三

かの事にあつては
おもひをもつてゐる
あたはひの意象

卷之三

あらんの秋の風よもやまと
机把りまくらをまくらす月よりうめのくくやう
されともうてうとをせりう
秋月あらまくらをまくらやえよどみ
あらね延喜房かづらまほのひときどきしてせりあらきとくま
てうとせり
もとよひのうとくまにせとく
もとよひのうとくまにせとく

卷之三

15

おまの御行の行うて生帝のことをうちり、主と爲るこゝに
あそをひきくともあまへり来るをあらわし

卷之三

久松徹子著
いづれもあらはすかうとあるをなむよしのう神のそばにまわる
怪體はくじてぬきの片肩あらまがひきくわざ縫ひきがまなむ
やうある衣乃やまほくのうねく月と色ふたむすびとひだ
へと接觸あらす方枕云とこられゆけりよお三事院
水産ゆめゆれむえくうつ毛丸毛丸ひくみゆくわよけり
只志野トガタアラヨリハ接觸けり、除修の如良
和とのまどひ称えの枕よハ源久と種々あつてさとるに
一厚いくわれよりきりそのゆきとのくじからひらひまむねて義友ア
ハのふみくわりヨハ
とある院
あくまで今もとある枕のめぐらめぐらそめぐら
段落有度くれきてよもや庵白川
ナカホシタマツ大二郎医良
りしゆくても、あとせぬらわあやと上りゆくよヨリテアさん
ゆまうりゆま子房さわわよりて原山院
もくじゆくもくじゆくのまくじ

坂一多處中まことにあてのら人のゆうり
かよひ人をもあからんむねくみよひわぬまに
小野まおちト力士もあくやを傍つ檜太納戸も家
むひとひかくぬりよひのをひきのとひく
かぢり思ひ下すまうりてゆひりよそと通じ
セテスレテうんゆく
わ泉寺ア
多喜とくにあまけ時の事よすとく内ノとあれ
上東尾ノイギムカシラリテ坂づねかうりしりくにうり
みのりのゆよ竹のとみをくか蟹す少酒をうずくらうり思或那
ア久乃独よあわタマあくゆうしまよあくゆうの浦
坂井莊院これも坂原三佐子經よりアリ并丸舟

おへゑりえり
様よりひあく
とくれりまのをか
おはがまつてよちにゆ
とくと下がりりきよか
とくとちくめよりりとくと
簡因法師
あも經人きみのあとま
あまやくはあよ
あくらん
おほき
おほき

おはなを覺へ
かくはやうてあらまわ勢力もうそりとくもをせぬれ
あらまわゆるはえちくゆきり人のあらわらとくわゆのうづけふ
あらわらとくわゆのうづけふ
さあたのひと
あらわらとくわゆのうづけふ
あらわらとくわゆのうづけふ
あらわらとくわゆのうづけふ

さうすう人をつぶせおまきを取らむよの意にまち
もとよりはよのうと見ゆるがゆくアキラの腰
紙をつりあはばりてやしをあへとすきひいそり
お春候歳もも年よきうわせやけりとすひきうちよらもわざゆ
れぬつづらけりやも年よきうわせもも年よきうわせ
尋まといひにあきととあじん珍るにひのみのゑを
金と金をもひまけりとすうけりあり活師
あたわざの面ひ紙のとおひとくとくうか人乃新うめ
ありゆきゆけりとくうか人乃新うめ
おとよやかとアリイもれおゆくとどひ新うめ
き事のと
はくわくわくわく
人乃新うめとよふよすへ
人乃新うめ

え後法部主うれひて周のそよ墓ふよらす清乃おあ傳言
かのあめりありくちのあまそ佛は書一けり四
くもきとさもひくもあひくもあくにあどりちをくじよゑの
ひひりやうアセヌムクナリナリけりとかくもえのま乃
をましよくうけりやけり
ちああち度
非を清源のぬよせんよわをもいづくもつとあらうアリ
あくまくく人のねととくにてうそとくにゆけりよほ移日遍
く人をもあらきのまくもくをくひ神
子の身アラリヨリつまの年れえのあよさアリマリケリヨリ
ちもああうりケリケリヨリ
わらんは也へとや神のくともも擣よどくめをたん
経部妙神
経因法師カタシロテは終むけり
苦系房おと
もアセヨアリモミクハカラヒトクレヒトウアリ
アモモカスのドアリアミのうち因房内侍リサヘアリ
於中納言連後
今がかくかなのをかかぬのアリあさの林さと
清院の口傳のうけ
中納言連後

かくひきりやふまゆうともあくあくもれそつとくとこを
まくわくけりうくあくらとゆよまくへうくうくあくすうくよ
もあくわくへくゆそくはくくわくまくをせんぬ

いひのうかうとすよかまくわらへむかく
あらゆるがあまむどみゆ
人磨

久遠の秋風の葉を吹き落す
月色もすすんで
小野の宿
あらわしあるが只の教訓をかみ取つて
ありまくせん

おもひがあつたが、おまかせをうなづくと、
おまかせをうなづくと、おまかせをうなづくと、
おまかせをうなづくと、おまかせをうなづくと、

文部の服を身に纏ひてゐる。延喜式清書

文部の服にておひらけをみゆのく延喜清う
年ぬきふくもとさきあまくはのこひくてよむわ
とひま人の家よかくりどきあくよすきよのわ
くわりきわくとくわくり
中肉を萬甫

叶經之詩體
もれんと思ひ出で、正義を抱く者よやくとどます
やまむらもあつて久しくりうちわをゆけりぬれりうき

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper, likely from an old book cover or endpaper. A prominent vertical crease runs down the center of the strip. The paper exhibits significant signs of age, including discoloration, faint smudges, and numerous small brown spots (foxing). The right edge of the strip is bordered by a dark, textured material, which appears to be the book's spine or a binding reinforcement.

あうてうすりよのとひの患難にアリシハルモニモ季綱

安樂院
七月二日
中務少
宰
新

皆れをくち見せよとわすれきとみえらわく
セヨリのふとのうちもくとみえらわくの
セヨリ、
累次第

卷之三

離別

ちのまわはりうるお紫斗とくよも

江東の風物記

伊勢
津勝

あくまでも軍人よりは、
軍事部

竹哥のうら様をまよひかぢりおもあひだす
うちのふくろひきとく
あふわくとくのふくろひき

まみの草をやうにゆひふをなみまへぬ
中細き鳥捕

おまへの事はおまへの事
車船より入る一ゆきの駕籠とあらひをもつてつう
くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
おと様子をうけとせり

おまかせの事はあまかね
おまかせの事はあまかね

お門よりまづひよいはせをそらす代に家を
うちのあまといそまわげの絶末おほきのけよつうけうきはまく

の事はあくまでもあらせいかれどもおのづかし
也

あはよやあひくまにあはるをめぐらす

左寧峰隱居
此君之子也
松風閣

事すにやのけりよも
事は跡めくせきりとよみのう

一
縷たぬきの
恒つね佐

たはよ里
あくせぬをまこととせられども此代時と、今か
成ゆる事入有りゆきりよ母のうむ行ひ

唐もああたまのまへにやうてはくと
はりがいとい人のゆうづけり 今法師

別れをあわや限ひそひらん身よつてまくら
むろあやの月七日つゝ下りよしとくとく
て八月のあらまあいとあすのとすううりかかくたけ門

うゆりん寺のくよる寺のあはせま／わがのまこと
育むみづくらむを教のくようけあゆ浦を房
船とれどもくよる寺の法の方／かくよる寺てつ
そのまじやけりぬ浦を事と教を波瀬をそひて田嶋の
えくわらの舟とい月とみよ経はま井すまうあつま
みちのくのくわいがわの船下り／あひあひうそくの行
ゆうえん船をもむけられめり難力／うゑくもあれ
ゆのよそゆけりよき／右信心にま
そとむまのまくわのまくわのどまれをえがゆ
然むがまくまくとくとくわくよまくうくはく人ふか
まれのふとまく
かくまくめりやまくとくた今やゆくの様みをまく
まく法／
うかん船をまほ思ひあくまうり方か子

うまくは船をみすくあまをゆり時左京院信部下
船ともあらねられりありまへ松浦の船と坐ち私
をとあらわくまくはどもや／金とまく神にけつ
ちくふとまくひきとく神ゆりよ御り／法師
ゑのあと月給ともとく神御りんあまのくされのまく
まくとくまくとくあまのくされのまく
かくまくめりの別やあまと老と御色えんとくく
別やあまとくまくあまのくされのまく

わまくはやどり故き處をかみまほはまくはまくは
聚めあへまちりうふはてどくちりう惟の聚め
ちあくははよなてもとんもあわくは様のりまの森
うぐいすの鳴よ月うぐいすの扇とつるまくそく人やお
歌とくの音よおと月とんとくの音
まくはうけりうよううけりう金けり家
別れを云ひおのあよゆうじとくさやの風乃はすくは
人乃あくあけりうよあまねつうそとて修う草あくはく
色ゆくはくはくあくをうじまくのれとまくは

新嘉坡集居士序

羈絏文

和服上衣之用者多是也。此
之於以內
元始大會主事司

とあるものであつて、あくまで、

壬午十二年十月卯
日望月山中
山憶良
人麻
いとよあひよりた松葉のそをハ源のふかみにむけ
りもくもて休ゆり
つまことけや日めぐらす
ありうる
わすれしものうちもと津川あはせてもやまもる

人言

萬のまきをふとそよひふるし秋のすゑ野あれ
伸のほそくつゝよちのゆるはりとて大山を移人
あよもえはくやどとゆゑのとくの山乃の山也
朝霧よりゆきあむりそてひくわきあく病にあらん
あひまほうけりよあさまのとよ等のとくを繕う在筆事
かきぬわくのりよ立物を廻へるやつりうり
立のまうのよもよもりてホイドリケ
とがれの山をひづれをまほすわらふとも

おれクノセシモもわよせらまうにかわよしは
ぬりうて

向たるよりよつて是處の山あけりまやうきん

よひやまやまゆらむとくわざせすせよやつて

伊勢もとようりめ

芭蕉御子

人ど移むるやや移むあるややもとよとよみハ
ぬりうて

すくもとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

あらうへとくふみやけり

大納言は後

きひのて寝ぐの席の跡よりあもとを枕風

大納言は後

まよすう宿のみをすまむにまかじ東風山風

後空院西門のものとそも候お候ゆくよほせに薩摩

あはとあわづとあけの山里に夜す。よ宿のとそも

後空院西門のものとそも候お候ゆくよほせに薩摩

あはとあわづとあけの宿をわらわらさひうらぬけよまざ

駿河流百草

大納言は後

山宿すとすはりにまちあむ白露は曉ゆきのあとの下

大納言は後

拿れ宿の内へましをよあつしの月をすふ化よ

あき落名とすとより。 深山賀野

休られぬとゆくの宿ねども山のまちやようう白日

大納言は後

宿ねどあわれぬされをきけよと喜ふるよじふいきや

あき落名とより。

みづみよと鈴や坐うる候人の笠白、かうす雪つすす

傷病者をうとと候ゆり。 陰陽も更に事

松根よもぎうちやもすくかづく袖よ雪の薄づ

ちもすくかづくは月半を承すまきもあえの事多持ようう

ナノ色とみの薄風ととせぬふまきもとうう秋の月

せたまのととまを覗中見月とううをとむか

茅枕やさうるあけうねむへつねくとく月よ宿さん

せたまのととまを覗中見月とううをとむか

まうとあせり宿を承あらむの月れわけのえ

まうとあせり宿を承あらむの月れわけのえ

まうとあせり宿を承あらむの月れわけのえ

まうとあせり宿を承あらむの月れわけのえ

大納言は後

大納言は後

まうとあせり宿を承あらむの月れわけのえ

まうとあせり宿を承あらむの月れわけのえ

萬葉集卷之四

日本書院藏本

月色見よ初月

月色見よ初月の山乃あらと照の月

ありしりん
ありは師

初月と月と名せよアリと教わるもアリと教わるも

月と月と名せよアリと教わるもアリと教わるも

ありしりん
ありは師

宣承門院丹波

日本書院藏本

後漢書卷下より今す合子事中史風とよどて移ら在るを家也

つあ今秋は霜どう衣色ゆくもれみのれ風しのうとそむ

行

猿人の神さうとれ風よ夕日みゆく山かけのけ

在系在院抄

聖天子風也山乃し風もあらわねとさわれ中山

在系在院抄

白雲あれづへの風とれわんか風山よ御と風也て

行

きあらみあらわ風來より書れいづきれ山う月きづくらん

あはれやう合子霧中書とよどき風と風を信多失後がせ

紅色枯れタと松もえ色のとくかとのあり

雅詩歌行

ひふきよちやあくよばれテ松もえのうとくらじのひ

宜秋門院丹波

絶とわまの風と色とよだれぬあらん雪也とえと

行

在系在院抄

葉れタれ風來人とりあはくもつよ御も御人

在系在院抄

ゆきいわちのとよれもれも風もあの風や一色りも

行

在系在院抄

寒ね乃木よわくとくとくとそ松や林らんよの中山

在系在院抄

詠やもれの風のタと葉もくらげわくとてやまん

行

在系在院抄

松もとうとめのまに吹風くゆとくとおむせのタと

行

在系在院抄

葉のれ葉もく葉よ風とくとれもくとくとくとく

行

在系在院抄

もくせよくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

行

在系在院抄

くわくわ枯乃樹のうかまに松くゆくゆくゆの山う

行

在系在院抄

行

在系在院抄

葉のれ葉もく葉よ風とくとれもくとくとくとくとく

行

在系在院抄

もくせよくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

行

在系在院抄

くわくわ枯乃樹のうかまに松くゆくゆくゆの山う

行

在系在院抄

移の事故にて家を合ひ財物と有る家を下
さうのとくはをそゆりふいかもの山乃崩れ
事無事あつた事多矣

蒙古文

卷之三

卷之三

今後御の時爲のと作る
今お家はひまく
うなぎ乃浦をもとす
うなぎの浦をもとす

今おまかせをすくねと
まことに大きめ後隊

清心雅源

おもとねむ朝朝

卷之三

迷懷更々の歌のう

此之謂也。其後又復有子雲、長安、平陽、河間、東方等家，皆以爲子雲之學。故其後人多好之，而不知其本源也。

よしとくかうとの宿すじあとありゆづわせ
和のふそぎのとひのまうりよおみをかねた

うきよのゆきをうけよ
約とすよあをひよ。あらかじとまきとよおはれわ

今も名とう乃山ゆゑもくはまの下みち

甲辰
春

鴨長角

あつま山林りく乃神とみよあくれ精を内氣こわき
百々うす内氣か
さうりよとのひよのきの爲るるざくもか
うきまくまかうく川のやまは常とせけり承後約り
ゆくんとわく川にまくねさじよ圓せたる
あの方ふきうりふ後約り わい法師
奉まくとくみあくとあひもやああきうるよ中山
振きとく
あひとくのひよあくれと爲りう神れうわくれ
無事トシカゲーと振のれと おとえ室
あつま山風わくとくうわが身も今が身もしなり

